

2018年11月19日京都新聞掲載

# 時代劇復活 熱い思い

## 映画「祇園祭」公開50年

映画「祇園祭」が1968年11月に公開されて50年を迎えた。俳優中村錦之助が製作を主導し、日本映画界のスターたちが会社の垣根を越えて結集したこの映画の意義とは。当時の現場スタッフや関係者の聞き取りなどを3年にわたって行ってきた京都大文学部研究所(京都市左京区)が市内でシンポジウムを開き、映画「祇園祭」を多角的に問い直した。(樺山聡)



映画「祇園祭」の一場面。中央が中村錦之助(京都文化博物館提供)

京大人文研が学内外の研究者で「オラル・ヒストリー・アーカイブス」による戦後日本映画史の再構築研究会をつくり、これまであまり顧みられてこなかった映画「祇園祭」の裏方を中心に証言を収集してきた。そこで浮かび上がった課題を検討するため、10月末にシンポジウム「映画『祇園祭』と京都」を企画した。

2日間で行われたシンポの初日に京大の時計台記念館で映画が上映され

映画「祇園祭」 応仁の乱で荒廃した京が舞台。笹屋新吉(中村錦之助)を中心とする若者や下層の商人、職人たちが団結して町の再建に立ち上がる。土一揆との戦いや六角堂炎上、近江の武装した運搬業者集団である馬借との同盟に、河原者の娘である娘あや

め(岩下志麻)と新吉の恋愛も絡みながら、上流階級との格闘を描く。出演はほかに三船敏郎、田村高廣、渥美清、北大路欣也、高倉健、美空ひばり。著作権は府が所有し、毎年祇園祭の時期にあわせ、京都文化博物館(中京区)で上映される。カラー、168分。

## 京大人文研がシンポ 裏方の証言収集、製作意義問う

と題し、製作を主導した錦之助の動機を探った。

映画「祇園祭」は、錦之助が代表を務める独立プロダクション「日本映画復興協会」が製作した。木村氏は、大手映画会社が俳優やスタッフを専



映画「祇園祭」を多角的に議論した京大人文研のシンポ10月28日、京都市左京区

属にする「5社協定」や、大手映画会社が製作から配給、興行まで統括して映画館も系列化する「ブロック・ブッキング」の体制が強かった当時の時代状況を説明。「映画産業が斜陽を迎えつつある中で日本ATGや三船プロなど独立プロの存在感が増した動きの一つと位置づけられる」と指摘した。

木村氏は、1950年代から東映の娯楽映画で活躍した錦之助は、60年代に入ってから時代劇減少にあつて会社の任侠路線への転換に消極的だったとした。また、65年の「東映俳優クラブ組合」の代表として矢面に立ち、翌年に東映との契約破棄に至ることに触れ、「時代劇スターとしてのキャリア確立や大部屋俳優の生活を安定させた気持ちで祇園祭の製作につながった」と語った。

滋賀県立大の京樂真帆子教授(中世史)は歴史学の観点で検証した。実際に祇園会(祇園祭)を延引に追い込んだのは室町幕府ではなく延暦寺だった点が映画では無視されていた。当初のシナリオには僧兵をイメージさせる「山法師」が祇園祭の再興を妨害する場面があつたが最終的に消えていると指摘し、「(映画製作側が)延暦寺側に付度したのではないか」という見方を示した。

映画「祇園祭」は明治維新から100年に当たる年に公開された。京大人文研所長の高木博志教授(近代史)は、この意味について考察した。戦後、天皇主体ではなく民衆に重きを置いた林屋辰三郎の歴史学が映画「祇園祭」の源流にあることを概観。全国で明治100年を放手して祝う記念行事がさかんな当時、蟻川虎三知事による革新府政とはいえ府が府政100年事業として支え、市民の協力もあつて上映された意義は少なくないと指摘。「明治150年の今年、映画『祇園祭』は、あらためて近代化を複合的に見つめる必要性を迫る」と話した。